

## 動く満蒙

松岡洋右

485-1

一、第一に日米關係に付て御尋致します。日米國交の益々報善ならんことを冀ふに於て、私は幣原外相に敢て謀るものではない。又近年日米關係は敦厚の度を加へて居ると云ふことも事實であります。而して漸に慶賀に堪へないと思つて居ります。——「そんなら質問することは要らないではないか」と呼ぶ者あり——然るに茲に併に豪慮に堪へない事象が發生した。凡そ國交は唯一方の好感を買つたり、一方の感情が好いと云ふだけで健全に報善振拂が永く保持せらるゝものではないのであります。

（一〇六頁）

## 二、滿蒙は我國の生命線である

滿蒙問題を論ずるに當つては先づ以て滿蒙そのものに對する明確な觀念の把握が必要である。

第一に、滿蒙に我國が牢固として抜く可からざる勢力を扶植したのは、決して侵略によるものではない支那が我國と最大なる關係にある朝鮮の獨立を脅威した爲め日清戰爭の止むなきに至り、次いで大潮の決するが如く南下するロシヤによつて再び我國の存立を脅かされたるがため、日露戰爭となり、其の結果戰局の有利なる結了によつて、賠償金の一部とし

てロシアの滿蒙に於ける権利を引摺いだのである。能く世人は滿蒙に於ける特殊権益と云ふがその権益とは果して何を指してゐるのか、人によつて一致せず又漠然たる觀念を持つてゐるが、私の輸る所では一つは我國の國防上の安固を計る上に於て、之を支那に任すことが出来ないと云ふ理論でない實際問題に、この権益は胚胎してゐるのである。日露戰爭は如實にこれを物語つて居り、更に其後の支那の事態とロシアの形勢がそれを明白に裏書きして居る。其後我國は滿蒙開發に基大なる力を致し、滿鐵の投資と、滿鐵外の投資とを併せて既に大約十七億圓に達し、世界に於て、今日滿蒙問題が喧しくなつたのけ主としてこれを我國が開發し、世界的にその價値を認められたからに外ならない。

支那人としては申し分もあらうが、我國と滿蒙との關係を冷靜に考へれば、國權を不當に犯すものゝ如く妄想して我國を驅逐しやうなぞとは以ての外である。支那人でも少し物の判る人達には其の誤謬は直ちに首肯される筈である。實は今日支那が滿蒙に注目したのは、我國の開發に刺戟せられたからに外ならないのである。

然し今日の滿蒙の地位は我國にとつては單に國防上重大なるのみならず、國民の經濟的存立に缺く可か

らざるものとなつて居る。換言すれば、現實問題として見る時、満蒙は我國の國際上のみならず、經濟的に見ても我國の生命線とも云ふべきものとなつて居るのである。何れの國に取つても其の存立の幹を握る生命線はある。英國のジアラルタル、マルタに於ける如く、國家の存立上其れ以上退却出來ぬ重要點は必ず存在するのである。

今議會、私が滿蒙政策を論じ時に生命線云々と云つたのはこの點であつて、國民はこの意味をはつきりと把握しなければならぬと思ふ。二十萬の在留同胞とか又は滿鉄の生存とかが我國より離れた満蒙問題の経べではない。夫れは固より重要事項ではあるが夫は唯だ問題の重要性を増す事極と云ふに過ぎない。今日の我國の國際關係に省みる時、又我國の經濟生活に鑑みる時、例へ満蒙に一人の日本人なくとも、又一厘の投資なくとも、更に吾々の熟知する歴史的關係なくとも、満蒙は我國にとつて重大なる關係にある地盤である根本に變りはない。即ち私の云ふ我國の生命線なのである。況んや多數の在留同胞と巨額の投資に加ふるに血を以て彫られた歴史的關係あるを思ふ時、益々我國の生命線である點に於て、これをしつかり確保し死守するについて、何國何人にも憚る必要なことは町かである。

支那人の中には我國の滿蒙への進出に對し、不平を抱く者あるも、歐米諸國に於ては我國の正當なる進出に對し吳謡を唱ふるものなく、明かに支那を除く以外の國々はこれを是認してゐるのである。問題となつてゐる米國の態度に就いても、世間で誤解してゐる如く、滿蒙問題に給つて我國と戰ふなぞと考へて居る頓狂人は一人もないと云つても過言でない。

英語の諺に曰

る。これは我國で「お前の頭の蠅を逐へ」と云ふ事であつて、米人氣質の一画を最もよく現してゐるものである。即ち滿蒙に於て我國のなすことは米人の知つたことではない。餘計なことを云ふな「それよりも米人は須く御自身のなすべき事をしつかりおりなさい」と云ふ事は、これを米人に卒直に云へば直ちに了解する國民である。

だからと云つて滿蒙に於て勝手にやれ、と云ふのではない。私の云はんとする所は正當なる事をなす以上日本は米國其他に何等倅る必要はない、又それは彼等にはよく了解されることであると云ふ意味である。もとより滿蒙開發に當つて三千萬の支那人を無視することの出來ないことは云ふ迄もない。飽くまで其の了解を求め、これと提携し共存する意味に於

て進まなければならぬ。而して私は自ら清蒙の第一線にあつて長年働き、これを實現せんと最大の努力をなしつゝあるものであつて、私の意圖する所は文部側が一番よく了解して居ることゝ信じて居る。然るに現内閣の清蒙は我國にとつて、以上の如き所白なる立場を有するに拘らず、清蒙の現場に於て、又清蒙問題に關し、宛も何人かに傳るるものゝ如き態度を取りつゝあることは遺憾に堪へない。今日迄我國の取り來たつた態度は寧ろ控へ氣味であつたと思ふ程であるに拘らず、現在我國の清蒙に於ける外交は更に氣合負けと位負けをして居る。これを建直さなければ駄目だと云ふのが私の主張である。斯く云ふからとて筆画を振廻す者は却つて卑怯者である。勿論我國の清蒙に於ける施政に就いて神ならぬ以上時々失敗のあるのは已むを得ない。又清蒙現場に居る同僚中にも吾々の誇り得ぬ分子も存在し、我國の反省しなければならぬ點もある。併し近年に於ける日文兩國間の行詰りの最大原因は、即ちこの外交上に於ける位負けと氣合負けである。従つてこの點を建直さぬ以上種々の技巧や小手先の細工を弄しても斷じて打開することは出來ない。この點に關して私は今講會に於てのみならず、尊敬する先輩として、幣原男に再三卑見を披瀝した。一日も早く國家のた

めに狂言せられんことを祈つて居る。これが現在に於て満蒙問題行詰り打聞の唯一の鑑である。斯く云ふからとて、直ちに支那人を威嚇せよと云ふのではない。私は二十七年間支那人と往復交渉した所併より充分彼等を理解し、眞に衷心より彼等の利益を増進せんとして居る點に於ては何人にも譲るものでない。例へば支那に於ける治外法権撤廃、關稅增收等に就いても、日本人で最初にこれを唱へたものは私であつたと思ふ。こう云ふこと、又私の考へ、態度は支那有識者の最もよく理解して呉れる所であると信じて居る。

## 三

次に我國民のはつきりした機念を持たねばならぬ他の主要なる點は、私が永年これを唱へ、満蒙問題研究の専門として居る東三省、即ち今日の東北四省一熱河省だけ増加一と東部内蒙古の地帯の開發、安定を計ることである。これが窮屈に於て支那問題の眞の解決をなすものであると信ずる。我國の國防上、經濟上の生存権を主張する上に於て、これが最少限度の要求であり、換言すれば、我國の眞の安泰をもこれによつて決し得るものである。更らに朝鮮問題の將來を想ふ時、これ又東三省及東部内蒙古の問題解決によつて眞の解決を成し得るものであるとの信

メモ一ノ

念を抱いてゐる。斯く考へ來ると東三省及東部内蒙  
古の問題がやがて極東の大局を決定するものであり  
今日世人の云ふ満蒙問題は實に極東全局の盤である  
との信念を抱いて居る。

更に一步を進めて理想を云へば、平面的の歐洲文明  
に對立して居る立體的の東洋文明こそ、人類永遠の  
幸福を表徴して居るものであり、而してこの東洋の  
立體的文明を復興し、擴大して世界人類をしてその  
恩典に浴さしめ、其の福祉を増進せしむる使命を負  
つて居る者は日支兩國民であり、其の光輝を發揚せ  
しむる地坂は實に満蒙であると信ずる。

更に一步を進めて理想と云へば、平面的の歐洲文明に  
対立して居る立体的の東洋文明こそ、人類永遠の幸福を基  
礎として居らるべきであり、而してこの東洋の立体的文明を復興し、擴  
大せし世間人類とセセラ心地に浴せしめ、其の福祉を増進せし  
むる使命と負て居る者は日本而國民もあり、其の元締を安  
堵せしむる地域は實に滿蒙であると信ずる。

二札は或は二十ビアンの夢想の様に思はれども、二點  
明確し、私は滿蒙過去の歴史を検討し、我が大和民族と如實  
の關係等に就て淺考乍ら相當の研究をなし、滿蒙の緯度  
・氣候、風土等に就てヨリこれを考へ、又世界人文史上の史実  
を尋ねたる結果、斯くの如き大胆なら結論を下し、それと私  
の滿蒙に対する窮屈の最高目標とと居るのである。我が國  
が滿蒙問題を考へる時、二札ニモ極東の大局に決定する鍵  
であると云ふことを強く意識し、更に述べた如き理想と併せ考  
へることを希望する次第である。前者は實際政治の範囲で  
あり、後者は理相に屬すが、二ツ二つかりからて滿蒙に対する  
我國の態度を明かにし、から信念に基く確固たる主張を最もく  
ことに、全幅の力を注がねばならぬと私は思ふ。

外交は單に日々起る普通の國際事勢を處理する事と本質とは云ふべからず。そん事をは事務局を以てすれば足りる。何より大きな外務者は必要と一すゝ。眞の外交は我國にとって最も重大なる死活問題である滿蒙問題の如きにつて其の意義を明らかにし、これに対する大方針を樹立し、我國民をして向ふ所を知らしめ、且つ世界の形勢も我が國是に順應せしむる様努力することであらざればならぬ。(昭和六年四月稿)